

令和7年度 第2回佐久市総合教育会議

日時：令和8年1月26日（月）

午前10時～午前11時40分

場所：佐久市役所議会棟 全員協議会室

1 開会

（木内企画部長）

改めまして、皆様おはようございます。

ただいまから令和7年度第2回佐久市総合教育会議を開会いたします。

私は佐久市役所企画部長の木内と申します。

しばらくの間、私の方で進行を進めさせていただきます。どうぞよろしくお願いたします。

初めに柳田市長よりごあいさつを申し上げます。

（柳田市長）

改めまして皆さん、おはようございます。

教育委員の皆様におかれましては、大変お寒い中ですが、令和7年度第2回佐久市総合教育会議にお集まりいただきまして誠にありがとうございます。

本日は、教育、学術、及び文化の振興に関する総合的な施策の大綱となります「佐久市教育大綱」について意見交換を行いたいと考えております。

教育大綱は佐久市の教育行政の根本となる方針を定めるものでありますが、現行の教育大綱の計画期間が令和4年度から令和8年度までとなっているため、新たな教育大綱の策定を進めています。

新たな教育大綱の策定にあたっては、教育委員の皆さんが日頃お考えになっている教育への思いや、佐久市の子どもたちの未来への思いについて意見交換を行っていきたいと考えています。

そして教育大綱で定めた基本理念を私と教育委員会でも共有し、方向性を決め、密接な連携を図りながら目指す姿を実現していきたいと考えています。

本日の会議が教育行政のさらなる充実と発展のため、有意義な意見交換の場となることを期待いたしまして、甚だ簡単ではありますが冒頭のごあいさつとさせていただきます。本日はよろしくお願いたします。

(木内企画部長)

ありがとうございました。続きまして神津教育長、ごあいさつをお願いいたします。

(神津(長)教育長)

改めましておはようございます。

本日は柳田市長、そして教育委員の皆様と、これからの佐久の目指す教育について意見交換を行う場を設けていただきまして、誠にありがとうございます。

先ほど市長のお話にもありましたとおり、市長部局と教育委員会が垣根を越えて議論できるこの会議は、教育施策を力強く推進するうえで必要な大切な場だという風に考えております。

今回のテーマであります「佐久市教育大綱」でございますけれども、佐久市の教育が進むべきビジョンを示すものであり、現在教育委員会において改定を進めておるところでございます、「佐久市教育振興基本計画」を始め、様々な重要政策を展開するうえでその根幹をなすものであります。

本年度、教育委員会におきましては、この教育大綱の改定を見据え、現在の取り組みの振り返りはもとより、子ども、保護者、市民の皆様を対象にアンケート調査、ワークショップ等を行い、学校教育や社会教育に対する期待や、日頃大切にしている思いなどの把握に努めてまいりました。

本日は、これらの調査結果も踏まえながら、皆様とともに佐久市の教育の目指す姿、子ども像、市民像等について、広く意見交換ができましたら幸いです。

ちょっと付け加えさせていただくのですが、先週「大学入学共通テスト」がございました。

新聞を見ておりますと、AIの普及は本当にとんでもないスピードで進んでいることを感じた次第でございます。

ChatGPTの進化版の通称「チャッピー」というAIが、6教科30科目ある試験のうち、9科目で満点を取ったというそんなお話がありました。

こういうAIが、小学生・中学生でもすぐに手に届く場所にある、こういう時代に、果たしてあくせくして、これまでの学力を獲得して大学入試に臨まなくても、大学の入試が満点取れてしまう。

それから司法試験とか医師試験を突破していってしまうようなAIが、子どものすぐ傍らにある、そういう時代にあって、本当に子どもだけじゃなくて大人や子どもが、このAI社会でどんな学力、「生きる力」と置き換えてもいいと思うのですけれども、それを身につけていったらいいのかということについても、

またご意見をいただければありがたいという風に思います。

本日はどうぞよろしく願いいたします。

(木内企画部長)

ありがとうございました。

それではこれより意見交換となります。ここからの進行は市長お願いいたします。

(柳田市長)

それでは次第に沿って、佐久市教育大綱について意見交換を行いたいと思います。意見交換に先立ちまして、事務局から説明をお願いします。

(市村企画課長)

企画課長の市村です。

私から事務局説明（１）教育大綱についてご説明申し上げます。

先ほど市長のあいさつにもございましたが、大綱の見直しにあたりまして、皆様方のご意見を頂戴するものでございます。

以降、着座にて説明いたします。

お手元の資料１をご覧いただきたいと思います。

皆様十分にご承知されているところでございますので、要点のみご説明申し上げます。

太字の「教育大綱とは」でございしますが、地方教育行政の組織及び運営に関する法律、「大綱の策定等」にありますとおり、地方公共団体の長は、アンダーラインにありますとおり、その地域の実情に応じ、地方公共団体の教育、学術及び文化の振興に関する総合的な施策の大綱を定めるものとする、と規定しております。

同条第２項におきまして、大綱を定め、又は変更する場合は、総合教育会議において協議するものとする、との定めがございます。

２番、大綱の位置付けでございます。

記載のとおり、市の最上位計画でございます、佐久市総合計画における教育文化分野の基本構想の柱に即し、教育委員会が策定する「佐久市教育振興基本計画」の基礎となるものでございます。

体系図にございますように、第二次佐久市総合計画は令和８年度末までの計画でございまして、現在、佐久市総合計画審議会において第三次の計画の策定を進めているところでございます。

裏面をご覧いただきたいと思います。

大綱の定義及び記載事項でございます。

(1) アンダーラインにございますとおり、目標や施策の根本となる方針を定めるものでございまして、(2) 主たる記載事項は、各地方公共団体に委ねられていること、下の行にございますように、予算や条例提案等の首長の有する権限に係る事項について、目標や根本となる方針が考えられることとございます。

(3) アンダーラインにございますとおり、計画期間は4～5年程度が想定されているものでございます。

4番の現大綱における基本理念でございます。

現大綱の基本理念は「生涯にわたり主体的・創造的に学び、生きる力を育む人づくり、まちづくり」でございまして、下の参考にございますとおり、総合計画基本構想の柱「生涯にわたり学び、生きる力を育むまちづくり」に即したものでございます。

5番、現大綱における目指す姿でございます。

目指す子ども像、目指す市民像は記載のとおりでございます。

本日はこの基本理念、目指す姿に関してご意見を頂戴するものでございます。(1)の説明は以上でございます。

(藤巻学校教育課長)

学校教育課長の藤巻でございます。

私の方からは資料2、佐久市教育大綱策定に向けた市民意見聴取の概要について申し上げます。資料2の方をご覧ください。

着座にて申し上げます。

佐久市教育委員会では、こちらにございますとおり、様々な機会を捉え、様々な手法によりまして、資料にありますとおり6項目にわたって意見聴取を行ってございます。

このうち1番から5番までについて私から申し上げまして、6番につきましては生涯学習課長より申し上げたいと存じます。

詳しい内容は後ほど順次ご覧いただきますけれども、1ページ目の下段にございますとおり、分析にあたりましてはアンケートの自由記述等の膨大なデータから客観的かつ効率的にキーワードを抽出するために、ユーザーローカル社が提供する無料サービス「ユーザーローカル AIテキストマイニング」を使用してございます。

こちらは一定の傾向を掴むうえでは大変有効なものとして捉えておりまして、この限りにおいて参考にさせていただきたいと存じます。

またグレーの網掛け部分にございますけれども、テキストマイニングとは、

文章を言語上意味のある最小単位で区切ることで出現頻度、語句の相関関係などの傾向やパターンなどを抽出したものでございまして、出現頻度が高いもの、また、希少性が高く文脈において特徴的な語句が大文字で表示されています。

また「共起ネットワーク」につきましては、単語同士の関連性や出現パターンの類似性を踏まえまして、文章中の単語のつながりを可視化したものです。

それでは2ページをご覧いただきたいと存じます。

こちらは10月に小学校5・6年生、それから中学校の全学年を対象に行った「子どもアンケート」の抜粋でございます。

「理想の学校」を問うた設問に対する回答でございます。

回答者は3,334名でございます。

テキストマイニング、共起ネットワークの分析結果は資料のとおりですが、分かりやすくするために、事務局において特徴的なものをオレンジの点線で囲ってございます。

これらの分析を踏まえまして、資料右下に導き出されたキーワードを拾ってございます。

なお、キーワードから逆算する形になりますが、資料の左下の枠囲いがキーワードの裏付けとなる代表的な意見でございます。

時間の都合上、詳細な説明は致しませんが、以降のページにつきましても基本的には同じ構成でございますので、ご了承いただきたいと存じます。

続いて3ページをご覧ください。

こちらは同じアンケートで「どのような大人になりたいか」という問いに対する回答です。

本日の議題の「目指す子ども像」というよりも、「なりたい大人像」ということになろうかと思えます。

分析はこちらの資料のとおり、キーワードは右下に記載のとおりでございます。

続いて4ページをご覧ください。

こちらは子どもアンケートと同時期に行った、保護者アンケートからの抜粋でございます。

設問は「佐久市の学校教育に求めることは何か」を問うたものです。

参考までに回答者は750名でございます。

こちら分析は資料のとおり、キーワードは右下に記載しております。

続きまして、5ページをご覧ください。

こちらは同じく保護者アンケートからの抜粋でございます。本日の議題と重なりますが「保護者が考える理想の子ども像」を問うた設問の回答でござい

ます。

キーワードは右下のとおりでございます。

続きまして6ページでございます。

こちらは昨年11月に行った「市民ワークショップ」における「目指す子ども像」に関する意見であります。

参加者は20名でございました。

こちらはデータ量が少ないうえに、それぞれ思いを持った方々のご意見ですので、前段までの保護者アンケートとは異なるものとしてご留意いただきたいと存じます。

テキストマイニングにつきましても、出現頻度というよりも、文脈における特徴的な言葉、例えば「インクルーシブ」や「レジリエンス」といったものが強調されている状況でございますので、ご留意いただきたいと存じます。

キーワードにつきましては、右下のとおり拾い出しております。

続きまして、7ページでございます。

こちらと同じくワークショップでの「目指す市民像」に関する意見でございます。

キーワードは右下のとおりでございます。

続いて8ページでございます。

こちらは10月に行いました、PTA連合会との懇談会の際に行ったワークショップの意見でございます。

やはり「目指す子ども像」についての意見でございます。

キーワードは右下のとおりでございます。

続いて9ページであります。

こちらは再び子どもの意見に戻りますが、10月から11月にかけて市内小中学校9校を順次訪問しまして、給食を食べながら子どもたちと意見交換をした際の意見であります。

「どのような学校を作っていきたいか」という問いに対する回答でございます。

キーワードは右下のとおりでございます。

以上、駆け足ではございましたが、学校教育課の所管分は以上です。

(木下生涯学習課長)

生涯学習課長の木下でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

私から資料2の10ページ、生涯学習に関するアンケート調査の結果についてご説明申し上げます。

こちらは12月から1月にかけて実施しましたアンケートでございまして、41

3名の市民の皆様からご回答を頂戴しました。

その中から、全体像を掴みやすい設問を2つピックアップして掲載しております。

なお、こちらのアンケートは自由記載方式のアンケート項目ではなかったことから、テキストマイニングや共起ネットワーク等の分析の対象に馴染まないということがございまして、このような表記になっております。

資料をご覧ください。

左側が生涯学習をしている方にその理由を、右側がしていない方にその理由を尋ねたものでございます。

これを、同様の質問を行っている直近の世論調査を引用いたしまして、「小都市」と比較いたしました。

小都市というのは、10万人未満の全国の都市を指してございます。

その差がプラス方向に開くほど、より濃くなる暖色で、マイナス方向に開くほどより濃くなる寒色で表記をさせていただきました。

それらの比較から佐久市の特徴を捉えてみたのが左下の欄でございます。

そしてそこからピックアップした、市民が生涯学習に求めるもののキーワードとして4点右下にまとめたものでございます。

ご参考にしていただければと思います。

資料2の説明は以上でございます。

(市村企画課長)

引き続き資料3の説明をさせていただきます。

資料3をご覧くださいと思います。

文部科学省の「第4期教育振興基本計画」のポイント、コンセプトでございますが「持続可能な社会の創り手の育成、日本社会に根差したウェルビーイングの向上」でございます。

中段に基本的な方針といたしまして、学び続ける人材の育成や、教育DXなど、(1)から(5)を掲げてございます。

次に長野県の「第4次教育振興基本計画」でございます。

青枠内、目指す姿は文科省の基本計画を参酌し、「個人と社会のウェルビーイングの実現」としており、副題で「探究県長野の学び」として、実現に向けて4つの政策の柱を掲げてございます。

裏面をご覧くださいと思います。

繰り返しになりますが、本日ご意見をいただきたいのは基本理念と目指す子ども像、目指す市民像でございます。

第三次佐久市総合計画の将来都市像、施策の大綱が示されてからではないか

とのご指摘もあろうかと思いますが、恐れながら同時に策定作業を進めておりますことから、ご理解をいただきたいと存じます。

なお、現在策定しております、第三次総合計画の教育文化分野の基本構想の柱は、現計画と大きく変わるものではないと考えていることを申し添えさせていただきます。

(3)の説明は以上でございます。

(柳田市長)

今説明が(1)から(3)までございました。

それぞれ目指す教育施策の方向性、子ども、保護者の皆さんの思いを踏まえ、新たな教育大綱における基本理念、目指す子ども像、市民像についてご意見をいただきたいと思っております。

少し整理をさせていただきたいと思いますが、「基本理念」に関する意見交換と、目指す子ども像・市民像の意見交換となりますが、この辺で分けたいと思っております。

最初は基本理念について、意見やデータに基づいた感想などありましたら意見をいただきたいと思っております。

口火を切っていただくということで、教育長いかがでしょう。

今までの教育大綱のことではありますが、基本理念の方を先行してお話しいただきたいと思っております。

(神津(長)教育長)

先ほどごあいさつでも述べさせていただきましたが、今の基本理念「生涯にわたり主体的・創造的に学び、生きる力を育む人づくり、まちづくり」という、これはとてもよくできた基本理念であって、すぐに変わるものでもないののでその理念を引き継いでいったらいいなと思うのですが、やはりですね、AIがこれだけ進展して、ひと月前とは違う景色が毎日のように繰り返されていると思うと、やはり大元のところでは「人間にしかできない価値創造」ができる力を育てていく。

人間にしかできない価値を育てていく、大人も子どもも育てていく、そのためにはどうしていったらいいのか、そこのところを考えていけたらいいのかなと思っております。

(柳田市長)

人間にしかできないの・・・もう一度よろしいでしょうか。

(神津 (長) 教育長)

「人間にしかできない価値創造」、価値の創造。
できない価値を作り出す力、それを学力と呼びたい。

(松井委員)

全く同感です。

私は今日ここに来た時にまず何を申し上げようと思っていたかというところ、
「人間とは何か」これを佐久市は率先して、これからのAI時代の中で、人間としての知力、「人間とは何か」を前面に打ち出すべきだろうということを胸に秘めて参った次第です。

もっと大きく歴史的、大局観的に申し上げますと、今は第三次産業革命真っ只中なんです。

インターネットの発明からデジタル技術、そして人工知能。

急速にこの人工知能が、2023年にChatGPT等多くのAIが公開され、加速度的に、指数関数的に進展している。

したがって人工知能は単なるツールではなくて、もはや我々生身の人間にとって共存・共生する、そういう対象として捉えていかななくてはならない。

つまり同じ人間の中でも、多文化共生とか、外国人との共生だとか、同じ人間の中での異種はあったが、今度は次元をもう1つ高くして、人間でないこの人工知能という存在を、人間との対比でどう共存していくか、こういう観点が明らかに必要です。

したがって理念として打ち出すのであれば、まずやっぱり主語は「人間」。

我々人間とは何か、そして教育長がおっしゃられたように、人間としての知力がどういう価値創造を図るのか、どういうことを軸に据えていくのか、ということだと思います。

(柳田市長)

なるほど。例えば「人間にしかできない価値創造」というものの1つの手法として、共生されるべきAIや人工知能との共生があつて、人間にしかできないから、AIを使わないではなく、そういったものを用いながら。

(松井委員)

多文化共生と重ね合わせて考えればいいです。

要は外国人との多文化の共生といった時に、では我々日本人だけで固まって、地域の人たちで固まって何ができるかではなく、一緒に共生する中で新たな価値をどう創造するのか。

共生の中で改めてこれまでの人間像とは違う「人間の価値創造」を図るか、
こういう視点が必要ですね。

(柳田市長)

問題提起として、これまでの大綱における現状が書いてありますけれども、
「生涯にわたり主体的・創造的に学び、生きる力を育む人づくり、まちづく
り」というのに異を唱える訳ではないけれども、状況の変化が大分あるので、
こういったところへの「人間にしかできない」という観点。

(松井委員)

人間にしかできないというよりは、人工知能との共存を図りながら、人間と
してのということです。

(柳田市長)

なるほど。どうでしょうか、付随するような形、または問題提起していただ
きました。

ご意見どうでしょうか。神津委員いかがでしょう。

(神津(利)委員)

今のお話を伺って、「人間らしい」という点では、やっぱり感性とか感覚と
か、そういうのを大事にしていく、そういう位置付けができればな、というこ
とを思っています。

私なりに考えてみたところなんです、現在の基本理念、これは本当に素晴
らしいなと思うんですが、やはり見てみると教育というのが「人づくり」、人
づくりに基づく「社会づくり」、それに資するものなんだろうなという風に思
うんです。

それで「人づくり」っていう点ではですね、現行のものを見てみますと「主
体性」「創造性」で取り上げてありまして、これはとてもいいとは思いますが
けれども、現状としてはなかなかこれが育ちにくいという課題を抱えていま
す。

なぜかと言うと、今までの長い学校教育の中で、画一的・均一的で正解を求
める、そういった教育の中から、なかなか主体性とか創造性が生まれにくい部
分もあったのかなという風に思っています。

そこで、その前の段階にスポットを当てるというのも大事じゃないかなと思
うんです。

それは今「人間にしかできない力」という話と共通するかと思うのですが、

「一人一人の個性や学びを活かす」、あるいは「生きる」っていうような、そういう視点が理念の中にあってもいいのかなということを思います。

いただいた資料に「ウェルビーイング」というのがありまして、私もウェルビーイングって読むにつれて本当にそうだなと共感するところがあります。

一人一人の個性や学びが「生きる」というのがありまして、「生きる」というのはウェルビーイングでもありまして、本教育委員会で「えらチャレ」を大事に考えていこうということなんです、これもやはり個性やその子の学びを「活かす」ということにも通じますし、探究にも通じています。

お互いの学びを積極的に認め合っている、そんな点を視点に加えたいなと思います。

(柳田市長)

「個性や学びが生きる」というキーワードを頂いたところであります。それぞれのお話、棚卸かもしれませんが宇都宮委員いかがでしょうか。

(宇都宮委員)

教育長や松井さんの考えにとっても共感しています。

本当に刻々と変化していく社会なので、AIとともに生きていく必要はあると思うんだけど、その中でやっぱり「人間らしさ」っていうのを大事にしていく必要があるんじゃないかなって自分でも思っています。

特に人間の「温かさ」っていうんですかね、「優しさ」っていうか、そういう面がこれから大事になってくるんじゃないかなと感じています。

そういった人としての人づくり、まちづくりというところを、佐久市で大事にしていきたいなと思っていて、人の温かさっていうのを佐久市の中でもこれからますます大事にしていきたいなと思っています。

(柳田市長)

ありがとうございました。小林委員いかがでしょうか。

(小林委員)

私は、先ほど神津委員がおっしゃった「ウェルビーイング」という言葉は、全てまるっと目的を包括しているのではないかと思っています。

それはなぜかというところ、AIを使いこなして、AIではない価値創造をするんだ、っていうところも勿論そうですが、とにかく私たちは教育で何をしたいのかっていうところを考えた時に、私たちは幸せになりたいのですよね。

幸せという言葉はすごく抽象的で、捉え方は人それぞれですが、ウェルビー

イングという言葉は昨今出てきて、「よくありたい」というところなんです。

幸せに生きたい、より良く生きたいという人間の願いというのは、誰も反対する人は居ないんじゃないかなと思っています。

なので、一人ひとりが大人も子どももですけど、尊重されるような世の中というか社会になって、安心安全なまちになって欲しいというのは誰もが望んでいるところで、それを実現するために佐久市がどうあるべきなのか、佐久市教育委員会の学校教育がどうあるべきか、社会教育がどうあるべきか、というところを考えていく必要があるんじゃないかなと思っています。

(柳田市長)

ありがとうございました。

この総合教育会議に関しては、何かを決定していくというものではないと再三お話ししているところでございますが、一方で今棚卸して出てきた意見であります、その中で、同意できる点やご感想などありましたらお話し合いいただきたいと思っておりますけど、いかがでしょうか。

(松井委員)

ウェルビーイングの関係で申し上げますと、そもそも英語原文のWell, beingと表記すべきと考えており、Well, beingにあることはもう不変なわけで、今に始まった話ではないということですよね。

beingがWellの状態であるっていうのは、これ未来永劫不変なわけです。

それが今の「現代的な課題」なり「現代的な文脈」の中で、Well, beingってどうなのか、こういう思考法で考えているわけです。

今、現代的な意味は何かと言え、再三同じことを申し上げますが、人工知能の向上の中で、人間としての本来的なWell, beingとは何か、という考え方で進めなければ、具体的に進まないです。

一番参考になりそうなのは、第一次産業革命の時、動力機関の発明によって、家内制工業から工場制工業に変わった。

これまでの人間としての存在が、工場の中の一生産要素となったのが第一次産業革命。

多分今と同じように、人間って何なのか、近代の成立とともに、人間の一人ひとりの尊厳って何だろうというのが相当問われた時期でしょう。

まさに今同じ局面を迎えていて、現代的な文脈でのWell, beingとは何か、を考えていく必要があると思います。

(宇都宮委員)

小林委員さんが言われた、ウェルビーイングの考えってとても大事なことだと思っています。

個人がより幸せになっていくという考えとともに、社会がより豊かになっていく、より幸せになっていくっていう、自分だけじゃなくて周りのみんなが、っていう考え方がとても大事になってくると思っています。

今、世の中が豊かになってきているんだけど、私は「人とのつながり」っていうのが薄くなってきているんじゃないかなと感じているんです。

その中でやっぱりウェルビーイングって考え方を大事にしていく必要があるんじゃないかなと、人と人がつながっていくという点で、大事にしていきたいと思っています。

私も台風19号で避難したことがあるんですけど、能登半島の大きな地震や雨の時に、地域の皆さんが力を合わせている姿を見た時に、ああいう助け合って本当に必要だなって思っているんですけど、ウェルビーイングって考え方を大事に基本的な理念にしたいなって考えています。

(小林委員)

補足をするんですけどね、やっぱり生涯学び合える、人と関わり合える、一人ひとりがとにかく尊重されるというところが、ウェルビーイングにつながっていくんじゃないかなと私は考えています。

勿論ウェルビーイングという大きな目的なので、そこに付随するように基本理念、子ども像、市民像を選定していく訳ですけども、とにかく人が尊重される、そこにつながるもう一つの私たちが大切にしている「コスモスプラン」というのがあります。

「読むこと、書くこと、行うこと」これは自ら考え、主体的に行動するという私たちのこの教育理念を持っているものに沿うもので、これもウェルビーイングにつながる力として、今までしっかり子どもたちに伝え育ててきたんじゃないかなと思っています。

(神津(利)委員)

先ほどの宇都宮委員の「人の温かさ」や小林委員の「ウェルビーイング」の話と同じだと思うんですけど、先ほど教育理念の中に「人づくり」と「社会づくり」があるのかなと言いましたが、その「人づくり」は私の先ほどの話では、個人の尊重っていうことになるんですけども、同時にこれから考えたいという社会づくりは、やっぱり自分としては「ともに」っていうことがキーワードになるのかなって思っています。

これは今までのお話と重なるところだと思うのですが、例えば子どもとか大人が。「ともに」っていうのは、周りの方々も「ともに」ですよ。

これって対話するとか、協働するとか、そういうことになってきますし、あるいは多様な方々、多様な考えの受入れ、これも「ともに」だと思うのですが、例えば外国人とか特別支援教育とか、そういったものも入るということ。

やはり人との「ともに」っていうのと、もう1つ大事に考えたいのは「学校もともに」っていうことなのかなと思うんです。今まで学校っていうのは自分だけで抱えてしまって、なかなか苦しんで前へ進まないっていうことはあったんですけど、やはりこれから考えると、学校が学校だけで解決するのではなくて、地域とかコミュニティスクールとか、そういう力を借りる、借りるというよりも、むしろ一緒に歩む、そういう意味で「学校もともに」。

これも広い意味でのウェルビーイングになるのかな、そんな風に思いまして、もう一度理念の方を考えてみると、「個人」と「ともにあること」を視野に入れておきたいなと思います。

(柳田市長)

「ともに」というのは、学校や社会であったりする、ということですね。

(神津(長)教育長)

お話を伺っていて、人間らしさを大切にした教育の充実こそが、ウェルビーイングにつながると思うんです。

宇都宮委員が指摘された温かさや優しさ、「ともに」ということは、AIは苦手です、絶対にやらないと思います。

やっぱり「人間らしさ」っていうのを大事にしていきたい、そのキーワードとして、「豊かな体験」っていうのが絶対不可欠だという風に思っています。

体験がなければ感じられません。

よく「不」とか「非」っていう、その漢字の頭につく接頭語に「不」とか「非」っていうのがあるじゃないですか。

「不満」とか「不合理」だとか、「非効率的」とか、そういうその揺らぎというか、AIは正解を求めていきますので、そういうものを弾きます。

エラーとして弾いてしまうのだけど、人間はその「不」とか「非」って付くその体験から通したその揺らぎというか、そういうものに対して興味を持ったり問いを持ったりするのだと思うのです。

例えば「今日ちょっと天気いいから遠回りしていこう」とか、AIだったら絶対遠回りしないで最短距離を選んでいくと思います。

今までイノベーションを起こしたり、色々研究している人の姿を聞いていると、失敗とか非効率を大事にして、そしてイノベーションを起こしています。

白川博士っていましたよね、電気を通すプラスチックを開発した人ですが。

間違えて何千倍もの薬品を混ぜちゃって、そこに薄くできたその膜、それが電気を通すものだっていうことに気づいていくわけですが、AIだったら多分そんな間違いしないです。

千倍も混ぜてしまうこともしないだろうし、混ぜてできた銀の膜が電気を通すのかな、これ一体何なのだろうな、なんて絶対に考えないと思う。

バグとして弾かれていってしまう。そういうものを感じるには「豊かな体験」というのが不可欠で、今の学校教育もそうですし、大人もそうですけど、「豊かな体験」というのをしていかないと、「不」とか「非」という人間が気づく感覚とか感性にはたどり着かないような気がしていて、そういうものを大事に、大人も子どももそういう体験を大事にした、そういう教育を続けていく佐久市であって欲しいと思います。

私が就任以来述べている「探究」ってことは、まさにその「不」とか「非」のつくものを「問い」に変えて、そしてより良くしていくっていう、それが究極的に「不」とか「非」がなくなって、ウェルビーイングになっていくっていう、そんな感覚なんですよ。

ぜひそんな探究という、文言も大事にしていけたらいいなと思います。

(柳田市長)

冒頭でお話した、人間にしかできない価値創造について、経験からもたらされる「不」とか「非」というものがあるけれども、それを否定して排除するのではなく、そこから生み出される価値が人間にしかできない価値創造に繋がっていく、そう思ってお聞きしました。

今日の会議は11時25分締めですが、半分半分とっていて、この後目指すべき子ども像、市民像についての話になるので、もう少しこの中身ですね、ある方あれば、ここで決める話ではないので、出すだけ出していただければ。

(松井委員)

私は実は、現行の基本理念の文言には非常に不満があるんです。

この「主体的、創造的」というのは、この概念、私は協議会でも何度も何度も申し上げていて、非常に重要なワードなんですけど、抽象的なんです。

そうではなくて、生涯にわたり、まさに対AIの中での現在の文脈でいけば、教育長がおっしゃった「体験」なんです。

人間にしかできないのが体験であると。

それを「ともに」行う、「主体的、創造的に学び」というこういう抽象的な言い方ではなくて、例えばですが、「生涯にわたり、ともに豊かな体験を通じて学び」とかですね

そういう言い方、提示の仕方っていうのがまさにそうだという風に思います。

そしてその後、第二文ですね、「ともに生きる力を育む人づくり、まちづくり」こういう感じなのでしょうね。

抽象的であるものをできるだけ排し、今の人工知能の時代の到来に合わせて、生身の人間として、何ができるかというのが体験であり、共感である。

AIも共感らしい言葉は出てくるんですけど、あくまでもあれはプログラムですから、やっぱり体験を通じて共感がある、絶対にAIにはできない。

そういう具体像を入れていくべきだと思います。

いずれにしても「主体的」「創造的」は抽象的だと思います。

(柳田市長)

せっかく時間があるのでお話すると、「人間にしかできない価値創造」というフレーズには非常に溜飲が下がります。

ちょっと政治に身を置いているもので、具体的なことで昨今感じたことを申し上げますと、最近追っている人がいまして、それは垂秀夫さんという人なのですが、前の日本大使で、在北京の日本大使だった垂秀夫さんという方です。

高市総理大臣の日中関係に関する発言の中で、非常にクローズアップされる国際関係ですから、それに関する発言が多くなってきている。

日中関係において「戦略的互惠関係」ということを編み出した方で、安倍政権において、そのことを外交的な柱にしていた方です。

その時に「戦略的互惠関係」つまりお互いが、メリットのある関係を作っていきましょう、それを戦略的に時間も含めて、お互いにWin-Winの関係ができるような話し合いをしていましょう。

それによって、政治的な話で恐縮ですが、安倍総理の発言を穏やかなものにしていくことを導き出したり、あるいは靖国参拝というものを行わない方向に少しずつ変えていった。

垂大使が総理へのレクチャーの中において、「これは中国をコントロールしていくことなんです」と、戦略的互惠関係を作ることは、中国をコントロールしていくことなんですと。

様々な思いが渦巻く中において、自分としてのこれまでの日本の外交姿勢に対して、極めて大きな疑問を持っていた。

しかし、日中関係において非常に詳しい方でしたが、これは日本の敗北では

なくて、懺悔外交の延長ではなくて、戦略的互惠関係を用いて、中国をコントロールしていくことなんです。

私が言いたいことは、配慮をすることによって、人の行動を整えていくという、優れた手法だと思っているんです。

言いたいことはですね、ウェルビーイングって自分の自力によって生み出される部分もあるのだと思うのですが、人と人との関係において、生み出されること、人の悩みの8割9割は、人間関係だということも聞いたことがありますけれども、人と人の関わりにおいて、自分だけの力でウェルビーイングってできるんじゃないくて、人と人の配慮し合う、先ほどお話があった言葉にも導き出されると思うのですけれども、こういうことは人と人との関係、ともに生きるっていう部分にも通じるのではと思うんです。

人間にしかできない価値創造、配慮をする、その人のプライドを傷つけないで、望むべき方向に整えていく。

自分の中で理解する時に、より具体的なことで自分なりに理解しようとする癖があるのですが、人間にしかできない価値創造というのは、人と人とであれば、配慮をするっていうのは、思いやりとかをすることなんです。

あと私が考えていることが、これは理念に書き込むかどうかは手法なのでそんなに拘らないのですが、望むべきこと、基本理念という風にやっていったときに、「こうなりたいよね」「こういうことを大切にしていこうね」となった時に、私はここ1、2年考えていることで「弱者の論理」と「強者の論理」ということです。

例えば書き込んだ時に、強者であればこの基本理念って納得できるよね、自分もこうありたい、行動をこうしたい、何かの場面を作る時はこうしていこうね、という風になるのだけど、「弱者の論理」となった場合に、それが出来ないとか、そういうことに言葉は悪いですが、不足がある場面にこういうものに相対した時に、どういう心理になるのかなと。

目指す子ども像になってしまいうけれども、子ども像が出た時に、それに自分が近付ける人は良いのですが、これは「強者の論理」、でも「弱者の論理」になった時に、そこに踏み出せない、という心理を持った時に、これを見た時にどう思うのかな。

だから書き込まない、ということではなく、これにぶら下がる物、基本理念の中に基本政策が出てきたりとか、施策が出てきたり、当然予算にもなりますが、ここに書き込まなくても、「強者の論理」と「弱者の論理」ということで、理想を語ったりだとか、求めていこうと考えた時に、ともすれば強者の論理となってしまうことがないのかなと。

だからといって基本理念のところで細かく書いていくと文章になってしまう

ので、それは好ましいと思わないですが、この下にぶら下がってくる、基本的な政策であったりするものに関しては、職員の皆さんの中で、配慮をしていただきたいと思います。

ひょっとしたら配慮というものも、人間にしかできない価値創造かもしれないけれど、それが目指すべき教育だけではなくて、目指すべき教育委員会事務局像、みたいに心がけていただくと良いのではないかと思います。

(松井委員)

強者の論理にならないようにするということですね。

(柳田市長)

強者の論理「だけに」にならないようにする。

一定の配慮というか、ある意味で言えば人間にしかできない価値創造、AIというものをそんなによく知っている訳ではないので、AIだって出来るぞ、となればそうかもしれないけれども、そういうものは合意しておきたいなと感じています。

宇都宮先生は特別支援を専門にやっていて、強者の論理と弱者の論理をどう思いますか。

(宇都宮委員)

本当にそう思います。

市長さんがおっしゃったこと、とても大事なことだと思うし、強者の論理だけじゃなくて是非「弱者の論理」っていうのも大事にしていきたいなことを思います。

(柳田市長)

ここに文言として入れなくても、運用の面として教育委員さんにも、元よりお持ちかとは思いますが、事務局の皆さんにも合って欲しいものだなと。

理想を書いてしまうと、理想に向かう施策にぶら下がった場合に、そこに入れない人がいた場合に、はみ出してしまわないかということです。

(神津(利)委員)

市長のお話をお聞きして、私も非常に胸に落ちる思いでした。

というのも、教育理念を考える時に、私頭に浮かんできたのは、自分は教員でしたから、教室の片隅とか、集団の片隅にいる子なんですよね。

子どものイメージとしては不安気で、それで自信がなくて、自己主張したく

でも出来ないというか、自己主張自体をしないで黙り込んでいる、そんなお子さんがいないわけではなく、そういう子たちに「主体的、創造的に考える」と言っても、土台が出来ていなければ無理であり、やっぱりそういう子たちが、「自分はね」、「僕はね」と片言でも良いから言えるような、そういう学校とか集団になって欲しいなと切に思っています、その子が自分でもこんな良いところがあるんだな、こんな可能性もあるんだなって、そう気づけるような社会とか学校であればいいなと思いました。

丁度教育委員会が出していただいたアンケートとかを見ますと、やはりそれに重なるんですね、子どもも親も。「安心・安全」が上位に来ています、どのアンケートでも。

子どもも自分が安心して、言ってもいいんだよ、やってもいいんだよ、それが認められる集団、そして親もそういうところにいてもらいたい、そうすればその子が持っている良さとか、可能性に自分で気が付いて、それこそが「主体的な」という面で、本当に大事にしていきたい。

表に出すかは考えるとして、根底に持っていたい。

そんな意味で、最初に「一人一人の個性や学びが活きる、活かす」そんなことを思って話したところがございます。本当に大事にしたいと思います。

(松井委員)

市長のご指摘も踏まえ、「ともに」という言葉はキーワードとして入れるべきだと思います。漢字ではなくて「ともに」というひらがなです。

このキーワードは入れるべきで、おっしゃられたこと全てこの3文字に入ると思います。

(柳田市長)

「ともに」を入れることによって、そうである子もそうでない子も、ということですね。

ちょっと話は逸れちゃいますけど、「えらチャレ」を作る時に、皆さんからご意見をいただいて作りつつあるし、やっていくのですが、自分が弱者の側になって思ったのは、「心と体が健康であれば、それでいいじゃないか」という思いに至りました。

不登校のことを考える「えらチャレ」の教育長との語らいの時に、どのように自分の経歴に持っていくか、それも大事だけれども、「心と体が健康であればいいよね」とチャレンジ教室というものの複数化、1中学校あたり1つ位に整えていきたいですよ、と言った時に、やはり教育長だなど思ったのが、それも大事ですけれども、加えて「学び」というものがそこにはありたいですよ

ね、という語らいから、今のえらチャレの骨格を教育長も作ってくださったのですが、そういうものが基本理念の中にもぶら下がっていくであろう。

施策が先行しましたけれども、それがぶら下がっていくことになります。

それは目指す子ども像の方にも付随するのだけれども、運用の面では多少先行したかもしれないけれども、そういったことを認識していただくと嬉しいかなと思いました。

「ともに」ということですがけれども、何故ひらがななんですか。

(松井委員)

漢字とひらがなでは全然意味合いが違います。

教育員会の言葉というよりも、漢字はあくまで形式です。

「共に」も単純に説明の言葉です。

「ともに」というひらがなは、それ自体に意味を持つんです。

大きな意味を持ちます。

(小林委員)

「ともに」というのも、勿論みんなと一緒にというような意味があると思うんですよね。

強者と弱者という話にもあったように、私は「選択肢を持たせる」というところがどの場面でも必要かなと思っていて、先ほどのえらチャレもそうだし、家にいることを選択する場合があってもいいじゃないか。

ホームスクーリングだとか、そこでも学びはできる、それを支援して出来ればいいなと思っていたり、必ず人と何かをしないといけないとか、そういうところに持っていくのではなくて、先ほどの目指す子ども像、市民像も、選択肢を持たせる言葉の選び方というのが大事かと。

「こうじゃなくてはいけない」、「夢を実現する子どもじゃないといけないんだ」みたいになっちゃうと、そこに当てはまらない人たちは苦しむということもあるかもしれない。

だけれどもそこに言葉として、選択肢を持たせるということが大事かなと、それはあまり抽象的ではなくて、選択肢を持たせるという、とても言葉選びが大変なのかなと思っています。

(柳田市長)

選択肢というあたりも運用の面で必要なことだと思います。

教育大綱の基本理念について意見を交わしていただきました。

少し話を進めさせていただきまして、「目指す子ども像」「目指す市民像」と

いうあたりでございます。

教育長少し口火を切っていただければと思います。

(神津(長)教育長)

目指す子ども像のところでございます。

「自ら考え 夢と志をもって とともに未来を拓く子ども」、これもとても文言として綺麗に流れていく素敵な言葉だという風に思っています。

一体どういう子どもを目指したいのかを具体的にイメージしていくことも大事だと思ひまして、私がこれを見た時に、「自ら考える」がスタートになっているんですけど、やっぱりその前には人間らしい「豊かな体験」がどうしても必要です。

それがないと考える基盤がないという風に思うのです。

ですからやっぱり「自ら感じ考え」とか、体験的なその人間の感覚ってものをもうちょっと入れ込むといいなと思いますし、そこから「夢と志をもつ」というのは、本当に大事なことで、夢を持つのは人間だけだし、「志」っていうのは、私は「目標」って読み替えているんですけど、さっき申し上げた「不」とか「非」を乗り越えようとか、人助けっていうところから信頼関係が生まれたりするので、目標を持つというのも人間らしいので加えてもいいと思います。

「ともに」というのは、先ほど議論が交わされたところですけど、市長や皆さんがおっしゃられるように、あまり理想を入れ込むと、そこに入りきれない人もいるということで、根底には絶対に据えていく必要があるというところと、小林委員がおっしゃった、あまり「一緒に」ということではなくて、選択肢も大事だよねっていうことも、その通りだなと思っているのですが、私の考える「ともに」っていうのは、協働というのをイメージしています。

極端な話ですけども、体力のある人とない人がいますが、体力がある人は、重い石を運ぶ時には力を貸す、そして体力がなかったり、力がない人は知恵を出す。

つまり人それぞれに持ち味があって、可能性があって、その持ち味を上手く活かしながら、課題を解決していく、それが「ともに」だと私は思っています。

「未来を拓く」についても、これが理想になってしまって、全員がそうなのかというところではないと思っていて、「可能性を拓く子ども」という風に思っていて、一人一人にはやっぱり生まれてきた意味とか価値があって、それをどんな形でもいいので見つけていく営みっていうのが教育だという風に思っているんで、ここは「未来を拓く」っていうよりも「可能性を拓く」ですね。

そのことが最終的には個人と社会のウェルビーイングにつながっていくと考えています。

そんなイメージで目指す子ども像を捉えています。

市民像も「生涯にわたり学び、互いに支え合い、輝き続ける」という、特にこの「輝き続ける」というのがちょっとイメージしづらいなと思います。

私は「生きがいを持つ」という市民アンケートにあった、何で市民大学に参加するのかといったら、生きがいを探しているのだと、そんな回答が一番多かったと感じます。

輝き続けるというのは、自分が生きてきた、生きている証に挑戦していく姿だと思っていますので、ここは「生きがい」とかに置き換えてもいいのかなと考えています。

(松井委員)

教育長のお考えに私は全く同感で、実は目指す子ども像も現行の文言は不満があつてですね、いきなり「自ら考え」が入っているので、起点がないんです、起点が。

「基盤」とおっしゃいましたが、全く同じ意味なんですけど、まず起点があつて、そこから自分がどう考えるのか、これが順番なんです。

おそらくその起点が「夢と志」ならば、それはいいと思います。

なので多分順番が違うのだろうというのが最初の印象だったんです。

「夢と志をもって」その起点があつて、「自ら考える」ということだと思います。

ただ夢と志以外にもアイデアがあるでしょうから、随時変えるにしても、考える起点が必要です。

それが体験だったりとか、志だったりとか、夢だったりとか。

そして「ともに」という言葉についても、全く教育長のおっしゃるとおりで、要は共同浴場の共同ではなく、みんなで一緒のことをしましょうね、ということが「ともに」ではなくて、教育長がおっしゃったのは「協力の協に稼働の働」ですよ。まさにそれなんです。

それはオプションを排除するというのではなくて、みんなが関わり合うということなんです。

したがって、1箇所でみんな固まって何かをやるということとは次元が違うんですよ。

未来を拓く、これ美しいんですけど抽象的なんですよね。

往々にしてこういうところではカッコいい言葉、抽象的な言葉になってしまう。

もっと分かりやすく、「ああそうだよね」という風に思えるものが理念なり、こういうところに必要ということです。

(柳田市長)

分かりやすい、理解しやすいのいいかもしれないですね。

(小林委員)

私は現行の教育振興基本計画の策定に関わらせていただいた委員の1人なのですけれども、その時は本当に台風19号があったり、コロナがあって、その後で策定するというので、本当に「ガラッと変えなきゃいけないよね」ということで、前教育長と前職務代理が中心となって、1年遅らせてでも、一生懸命毎日議論をして作り上げたものであるということを前提としてお話ししておきたいと思います。

その中で、この目指す子ども像というのが、一体主語が誰なのか、あと誰に伝えたいのかな、というところを最初に疑問に思ったんですけれども、やっぱり子どもに伝えたいということであれば、分かりやすく、具体的に明示しやすい言葉で作った方がいいんじゃないかなと思っています。

例えば「毎日楽しく朝起きれる」ということをイメージしているんですけれども、もう1分でも早く学校に行きたいと言って走っていく、自分の子どもの姿を見て、そういう学校教育になって欲しいなと思っているので、そういう子どもを増やしていきたい。

なので、「毎日楽しく学んで人と関わる中で成長して行って、そして未来に希望を持って生きる子ども」と私は言語化してみました。

(柳田市長)

この目指すべき子ども像というのは、相当な議論、時間を費やして作っていったものであって、宇都宮委員さんも関わりがあったと思いますがいかがでしょうか。

(宇都宮委員)

自分も小林さんたちと一緒に策定した1人ですけど、その時に本当に世の中これからどうなっていくか分からない不透明な、複雑な世の中になっていく時に、やっぱり自分で考えて判断していく子どもにしたいなっていう願いもあって、まずは「自ら考え」を大事にしたいってことで1番先に来たんだと思います。

今年学校訪問をした中で、学校が変わってきているなど実感しているんで

す。

目指す子ども像に向かって頑張っているんじゃないかなと思っていて、学校が子ども中心の学校になりつつあるんじゃないかなと思っています。

教育長が自走する子どもということを掲げてくださっていて、凄く共感して共鳴する部分があると思っています。

今年、学校訪問をして1番感激したお子さんがいるんですけども、探究的な学びの発表会を見たのですが、中学1年生の女の子で、3年生に混ざって、佐久の今まで隠れていた良さを探究したいということで、食を通してあるお店を紹介してくれたんです。

その店に行って自分で食べてみて、その美味しさに感激したり、お店の方の親切さに感激したっていう言葉を発表会で、原稿を見るんじゃなくて本当に自分の言葉で言ってくれた姿を見て、感激して、あの店に自分も行ってみたいなと思って、2回も行っちゃったんですけど、本当に探究する子どもになって欲しいなっていう願いを持っています。

そのために、豊かな体験で成功体験もして欲しいし、この前二十歳の集いで言ってもらっちゃったように、間違った体験もして欲しいなと思います。

まさに豊かな体験って言うんですかね、そんなのを子どもたちにうんとしてもらって、未来を切り拓いて欲しいなと感じています。

自走する子どもたちになって欲しいなと思います。

(柳田市長)

今の宇都宮委員のお話で重要なのは、学校現場でその目指す子ども像を意識した行動があると思いき結果が生まれているということがとても重要なことで、何のために作ってあるかと言ったら、それを実践する現場において認識する、認識して納得があるとありがたいことかもしれないけど、こういうものを作って1冊の大綱が出来ました、では絵に描いた餅になってしまいますので、現場での活かされ方っていうのも期待をしたいし、工夫をしていってほしいものだと思います。

これは学校現場だけではなくて、それぞれのセクションで認識していただきたいなと思います。

(神津(利)委員)

今色々ご意見を伺って、自分も全くその通りだなと思っているんですけども。

目指す子ども像で、2つの点から子どもを見たいなと思ひまして、1つは

「今を精一杯生きている子どもたち」だなど、もう1つは「未来を担う作り手としての子ども」だなど思うのです。

自分では3つ考えていて、1つは「個」としてどうか。

その子の良さを認めたり受け入れることは前提なんですけれども、そのうえでやはり個の「主体性」っていうのは大事にしたいです。

2つ目は先ほどから話題に出ている「ともに」、これは協働する力、全く私も同じなんですよね。これは対話とか多様性を受け入れるということでもあります。

そして3つ目は「豊かさ」なんですよね。先ほど体験のことが出まして、私も体験については全く同感ですが、「豊かな感性」っていうのは体験、やっぱりこれが1番だけれども、もう1つ、いろんな人との対話とか出会いから豊かさが出来てきますし、書籍との出会い、これも豊かさになっています。そういう意味で体験とか出会いとか思索とか、そういうのを合わせて「心の豊かさ」っていうのも位置付けていきたいな、そんなことを思っています。

それと、目指す市民像で教育長が「輝き続ける市民」っていうのについてお話しいただきましたが、実を言うと私もちょっとこのところが気になっていて、これ自体は良いと思うのですが、資料の説明文に「自己充足感を持って活躍して」ってあるんですよね。

私はやっぱり市民像なので、今の「より良い社会の作り手」を考えれば、これは自己充足感ではなくて「自己実現」じゃないかなと思ひまして、学んだり、社会の構成者の一人として「自己実現」していく。

自己実現っていうのは、自分が思ったことがこう叶っていくっていうだけじゃなくて、社会との関係があると思うんですよね。

みんなの役に立ったとか、あるいはみんなから認められていく。

そういった社会の一人、担い手の一人になっていく。

そういう点で「自己実現」という社会性を持たせたものが市民像として考えていけばいいかな、そんな風に思います。

(柳田市長)

その説明は両方あると納得できる気がしますよね。

自分自身の充足ということと、それが自分だけではなくて、社会の関係の中において、実現できるというというのは、両方あるとよく理解できる、「輝く」という状況かもしれないですね。

私が思うのは、ここに謳いこむかどうかということではなく、今後社会が向かう方向は「子育ての社会化」だと思います。

かつて介護というのは家庭的なものであって、平成12年に介護保険という

ものができて、掛け金というものがあって、そして給付があって、自分の負担もあるということで、あの保険がなかったら、今の日本の最大の課題は介護だと思います。

社会的にこの施策がなかったら、通所介護もない、家庭介護もない、施設介護もない社会っていったら、回らないです。

平成12年にそれを社会化していこうというのがあったと思うのですが、これで給食も無償化になります。

今後いろんなものが無償化ということになっていくのだろうと思うのですが、そういったことを「子育ての社会化」ということになると思うのです。

佐久市で今日的な現象としておきているのは、未満児保育の保育率の上昇です。

以上児未満児と言っているのは3歳以上児、3歳未満児という意味ですが、3歳以上の特に4歳、5歳の保育率っていうものはもう9割を超える状況です。

この3歳未満児っていう負担が今後軽くなっていくでしょう。

そうやっていった時に、保育率は上がります。

その時に僕たちが本当に重要として考えなきゃいけないのが「愛着形成」をどうしていくかという話だと思います。

これは保育という、今までの福祉分野だけに留めておかない方がいいのではないかと。

認定こども園というものが、中込第1、第2保育園と一緒に7月からスタートします。

保育園というのは基本的には保育に欠ける家庭への保育を行う福祉施策です。

幼稚園というのはご案内のとおり教育機関という形になります。

これが合わさって認定こども園という形で、認定こども園に関しては親御さんの保育に欠けるかどうかなんていうポイントは見ません、となった時に、1歳児2歳児の認定こども園的な物、となった時に目指す子ども像とかが密接に絡み合うと思います。

愛着形成、自分自身が愛されているっていう感覚、これが自己肯定感っていうものに直結していくっていうことは、論でも言われるし実体験としても凄く感じます。

社会化が進んでいった時の、これは子ども像というよりは市民像かもしれませんが、母親だけが愛着形成を行えるなんてとても思わないけれども、ただ愛着形成というものをどう整えていくかということ、家庭で話しておくべき重要なポイントだということを感じます。小林さん、どう思いますか。

(小林委員)

私は普段、女性の自由な働き方を応援する市民団体を運営しているのですが、その中で保育士さんがいて、保育士さんをやっている時に、自分の子どもが例えば3歳とか5歳とか、もっと未満児でいた時に、自分の子どもを預けて人の子どもを見るというところにとっても矛盾を感じて、本当は自分の子どもと一緒にいたい、けれどもそういう状況になって、働き方を考えて起業した、というお母さんがいるんです。

その話を聞いた時に、本当に自分がどうしたいのかというところが1番大事で、子どもと一緒にいたいという時期は、子どもと一緒にいれる環境を制度として作っていただきたいなと思っています。

例えば、息子に言われたことがあるんですけど、幼稚園に入ってきたらいいじゃん、と言われたことがあるんですが、例えばボランティアだとか、少しでも有償で、その幼稚園とか保育園のお手伝いができる制度があったりすると良いのかなと思います。

(柳田市長)

非常に危機感を持っていて、社会化することによっていろんなものが無償化してきます。

無償化することによって、利用しやすくなりますけれども、人が成長していく中において、「愛着形成」っていうものが言葉を選ばずに言いますが、整わないまま、そういうことが整備されないままそのサービスを使っていくことによって、将来「社会的課題」っていうものを大きく残すんじゃないかと思っています。

当然そういったサービスを使ってもらいたいですし、社会的にはそういったことにより、労働力不足というものがもっと今より激しくなりますので、そういったものへの期待も大きいです。

ただその時に社会化していく子育てというものに対して、問題提起しておくことを今しておかないと、何か起きてしまうのではないかと、という思いがあり、これはどちらかというところ、あまり教育分野に関しては話をしてこなかったと思います。

その数年後から学校教育というものが始まっていくんですけど、そういうことでの歪みというものを、恐らく学校現場で感じている方もいらっしゃると思いますし、今後そういった大きな課題が出てくると思います。

そういう意味では、ここも目指す子ども像とか目指す市民像に書き込むこととはちょっと違うのですが、その辺の配慮として持つべき守備範囲が、教育はちょっと広がってくる可能性が高いので、そんなことを申し上げさせて

いただいたところであります。

この目指す子ども像、市民像についてももう少しという方がいらっしゃいましたら挙手のうえご発言ください。

(宇都宮委員)

市民像の方ですけれども、私実は佐久の生まれではないですけど、38年目になります。

佐久に来て良かったなと思っているんです。

この自然の豊かさ、特に晴天率が本当に高いんだなと思っている、この市民像の中に「地域愛」っていうか、「佐久に生まれて良かった」っていう思いが入らないかなと思っているんです。

そう思っている1つのきっかけは、今住んでいる所で地区の地区長をやっているんですけど、なかなか決まらないもので、もう10年ほど前から班で順番に回そうってなったんですけど、ここに来てなかなか地区長っていうのを受けてくださらなくて、そういった役を受けたくないの、「区を辞めたい、自治会から抜きたい」っていう方が出てきちゃったんです。

自分も今地区長をやっていますが、感謝の気持ちがあって、佐久に住んでいて良かった、なんか恩返ししたいなって気持ちで受けているんですけど、これからますます「地域のつながり」っていうんですか、人のつながりっていうのが薄くなっていくんじゃないかなと思っている、佐久に生まれて良かった、そういう感謝の気持ちで過ごしていく市民になって欲しいな、自分も出来ることをやっていこうという思いでいてくださればな、という思いで、毎日感じています。

(柳田市長)

なるほど。そこに生まれた喜びであったり、誇りだったり、そういうものを感じる感性というのも大切なことですよね。

(宇都宮委員)

台風19号の時、自分が避難生活をした経験というのが自分の中で一番大きいです。

尽力して下さった皆さんのおかげで、もとの家に戻れて住んでいるという経験が自分の中にあります。

(柳田市長)

人口の変化を考えると、ともに生きていかないと社会が成り立たなくなってしまう感じですよ。

そういう意味で言えば、結果として自治会から離れていくのではなくて、何か支えあうものが生み出されるような地域になって欲しいですね。

(神津(長) 教育長)

先ほど市長の方からご提案といたしますか、問題提起がありました、育ちの部分の「愛着形成」をどうやって整えていくのか、どうするのかという問題は私にはなかったものですから、凄く新鮮に思えて、確かにこの図を見ると、基本理念があって、目指す子どもがあって、目指す市民という、スタートが小学校レベルからの目標に見えてしまう。

そう言われてみると、育ちの部分についてのものが無かったと思った時に、これは提案ですが、基本理念の下に、目指す佐久市の教育環境像というか、育ちの部分も含め、そういうものも含みこんでいくとスタートが小学校からに見えないかなと思います。

先ほどの学校教育、大人になってからの社会教育の手前に、人として生まれてきた環境、愛情の問題ですよ。これって根幹のような気がしているんです。提案です。

(松井委員)

本当に、子ども像、市民像、姿ですので、今日逆説的に今我々が置かれているこの本格的な人工知能時代で、どういうリスク、どういう像になりそうなりリスクがあるか。

逆説的にとってもいい材料があるのでお持ちしました。

ニューヨークタイムズの風刺画なんですけれども、今、「愛着」とか「ともに」とか、それをAI時代の中で、失った人間がどうなるかっていうのをこういう姿で風刺しているんですね、ニューヨークタイムズ。

この記事の中では、それを失うことを避けるがために「私はチェーンソーを買った、つまり庭師になった」という話題を。

皆さんもどこかで見たことがあると思うんですけど、これ模図かおの「まことちゃん」のような、こういう姿に我々が陥ろうとしていると。

(小林委員)

先ほど目指す市民像で、神津職務代理が「自己実現」とおっしゃったんですけど、私たち親世代が自己実現を目指し、そこに一生懸命やっていけば、自己実現をしていけば、愛着形成というのはしっかりとできていくんじゃないかなと、自分の子どもに対してですけど思います。

ここは本当に順繰りに回っているというか、本当に全部つながっていて、私

たちの目指す市民像というところから、また子ども像だったり、私たちの自己実現をしていく基本理念だったりというところに関係してくるので、全てここが関連していて、愛着形成という先ほどの言葉もすごく大事な、私たち色んな「いじめ」だとか、日々教育長もおっしゃってくださっているように、問題が起こった時に何が1番根本にあるかと言ったら、そこだと思っているんです。

なので、愛着形成をしっかりと見ていかないといけないなというところは、小学校からではダメだな、というところを私も感じています。

(柳田市長)

先ほど申し上げた内容のことをここに書くかどうかですが、ある意味で言えば、愛着形成というのは「互いに支え合い、輝き続ける」で読み取れるんじゃないか、ということもあり得るんですよ。

運用の部分で、ここにぶら下がってくる施策というようなところで意識してもらいたいという感じです。

今後目指す市民像、子ども像についても、この大綱の中では議論をしていくということもあります。

やはり抽象的にならざるを得ないというのは、これから紐づけされた事業、予算執行まで伴ってくるので、そういったものを包含する形なので、少し抽象的なものになってくると思っています。

目指す子ども像については振興計画の時に定義付けしたものであって、相当な時間を要してきている形で、この説明を受けると納得できるところも、ご意見いただけたところもあろうかと思っておりますので、そんなことの機会を得ながらやっていければと思っております。

この大綱に関しては、実は教育委員会で作るのではなくて、企画の方で作る形になるんです。

企画の方で作る形で、そしてそれを運用するのは教育委員会の方になるような場面もあります。

運用は教育委員会だけではないです、他のところも当然参考にさせていただくこともありますけど、今後、企画部の方で整えていっていただきたいと思えます。

今日の議論の中で多くの有益な語らいがあったと思っておりますので、是非、今後の決定に反映をしていっていただきたいと思えます。

時間を超過しておりますので、以上でこのディスカッションとさせていただきます。

(木内企画部長)

ありがとうございました。

それでは最後にその他でございます。事務局からお願いします。

(市村企画課長)

本日は大変貴重なご意見を頂戴して誠にありがとうございました。

今後の教育大綱の策定スケジュールについて、手短にご説明させていただきます。恐れ入りますが資料4をご覧くださいと思います。

こちらの資料には、佐久市総合計画、教育大綱、佐久市教育振興基本計画の3つの計画の策定に関するスケジュールを示しております。

教育大綱は真ん中の段になりますが、本日の会議で皆さまよりいただきましたご意見を基に素案を作成し、作成後は、教育委員協議会において教育委員の皆様からのご意見を、また、パブリックコメントにより市民の皆様からの意見を聞きながら策定を進め、令和8年12月の策定を予定しております。

意見交換前の説明でも申し上げましたとおり、佐久市教育大綱は市の最上位計画である、資料上段の佐久市総合計画における教育・文化分野の基本構想の柱に即すものであることから、佐久市総合計画の策定に合わせる形で策定を進めることとなりますが、引き続きご協力をお願いします。

また、次回の総合教育会議につきましては、議題、日程等が決まりましたら事務局より改めてご連絡を差し上げますので、よろしくをお願いします。

(木内企画部長)

それでは本日の会議事項全て終了いたしました。これにて閉会といたします。ありがとうございました。